未刊室町後期歌会資料―釈文と略解題―(五)

武井和人・酒井茂幸

【緒言】

小論は、未刊のまま多く残されてゐる室町後期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図としたものである。

今回の小論では、国立歴史民俗博物館蔵高松宮本の中から、以下の未刊歌会資料二点を選び、釈文を掲げ、併せて略解題も付した。各歌会の本格的な考証は、今後の課題としたい。

1 侍従大納言家着到千首（H―六〇〇―四六五）

2 宗匠家続百首和歌（H―六〇〇―四六三）

なほ、略解題末尾に当該歌会資料の釈文・略解題の担当者を（　）に入れて示した。ただし内容は、著者相互に検討してゐる。

釈文作成にあたり、以下の方針に従つた。

(1)漢字は原則として通行の字体に統一した。

(2)丁移りを、」一・」一一の如く示した。

(3)鼇頭に小紙片が貼られてゐる歌は、当該歌の詞書末尾に◆を付して示した。

(4)上句と下句の間に、一字分空白を設けた。

なほ、各底本の書誌は、略解題を参照されたい。

小論は、

①「校勘の方法に関する基礎的研究」（平成二三～二五年度・科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究〔二三六五二〇五〇〕、研究代表者＝武井）

②「中世後期歌会資料の総合的研究」（平成二四年度・埼玉大学研究機構プロジェクト（研究費）《一般研究②外部資金獲得促進研究》、研究代表者＝武井）

③「室町後期歌会資料の総合的研究」（平成二六年度・科学研究費補助金・基盤研究（C）〔二六三七〇二〇〇〕、研究代表者＝武井）

による研究成果の一部を含む。

（武井和人）

1 侍従大納言家着到千首

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H－六〇〇－四六五）〕

侍従大納言家千首〈文亀三重陽着到／十人詠之　抜書〉（外題〔題簽〕）

侍従大納言亭千首着到之中抜書文亀三重陽　十人詠之（内題）

立春　実隆

君か代を雲井はるかに契りてや　けふ九重に春はたつらん

政為

あらはれぬ色香をまたき思へとや　けふ花とりの春はたつらん

山早春◆　済継

朝またき消あへぬ雪ものとかにて　外山の雲に松風そふく

海〻〻　公条

行ゑなく霞そたてるわたつ海の　浪のいつくと雲はきぬらん

都〻〻◆　為孝

よそにいまおもはゝさすかのとかなる　松も都の空にきぬらん

早春風　公瑜

山風も霞の袖におほはれて　今朝はた春の道そのとけき

〻〻雨◆　資直

君か代によもの草木も雨露の　めくみかはらぬ春やきぬらん

〻〻水◆　道堅

むすふ手のしつくはけさも氷ゐて　関のし水に春風そふく

霞始聳◆　政為

ふる年の空さりけなく朝かすみ　春のしるへの色はへにけり

嶺霞◆　公条

いかにして雪けなからの霞には　春をもしらん嶺のときは木

霞中滝◆　為孝

つゝみあへぬ霞の袖にさほ姫の　くる手もしるき滝の白糸」一

浦〻　公瑜

春そとはゝ霞にかはる色もなし　おなしけふりのしほかまのうら

故郷〻◆　資直

渕瀬をもわかぬ霞のみちのくや　春行人の袖のへたてを

羇中霞　実隆

立そひて野にも山にも春かすみ　たか故郷の心みすらん

若菜　資直

山さとの若菜つみにとくる人に　都はけふの雪まとそしる

求〻　道堅

打むれて日影たつぬる朝霜に　若菜つむ野はとをさかりつゝ

摘〻　実隆

梓ゆみいそちの春をかそへても　たれわかための若菜つまゝし

原菜◆　政為

都にもかよひにけらしわかなつむ　山田のわらの春のめくみは

沢〻　済継

わかなつむ山田の沢に袖ぬれて　こほらぬ水の春そさむけき

名所〻◆　資直

春きては若菜つまむとわきもこか　しめ野〻あさちわかぬ日もなし

谷残雪　道堅

とちはてし谷の柴屋の春の色に　はしめてむかふみねのしら雪

竹畔残雪　実隆

うつもれし雪の村竹おきかへり　露うちそゝき軒の春風」二

庭ゝ◆　政為

庭の面にいとひし物の名残あれや　たか跡ならぬ雪の村きえ

墻根ゝ◆　元長

きゆるをはさらにもいはしのこりてそ　墻根の雪の春をみせける

河辺鶯◆　資直

谷川やゆく瀬のこゑは鶯も　さそはぬ水に春風そふく

嶋鶯◆　道堅

ことのはの花もさくらし敷しまの　みちにきこゆる鶯のこゑ

鶯馴　実隆

山ふかき心もしらて朝夕に　人まちかほのうくひすのこゑ

ゝ為友◆　政為

なくさめてなく鶯に春もへぬ　人にはうとき老のあはれと（を）

ゝ稀◆　済継

ふるすとは思ふ物から谷の戸や立いてしまゝの鶯の声

栽梅◆　資直

くすかつらくる人もなきをかのへの　さとゝふものはあきの夜の月

梅盛　実隆

色もさそ匂の渕もけふをせに　せくはかりなる梅のした水

見梅◆　政為

風の上にゆくゑ（本ノマヽ）と思むめの花　けふこそ袖の色かとはしれ

軒梅◆　済継

折つくす心の色も梅の花　つゐにとはすは誰にしられん

寝覚ゝ　公条

鳥の音もきこえぬ宿も梅からに　夢をのこさす曙のうち」三

軒移袖　資直

たか袖にうつしはてゝもかきりなき　句（匂）にかへる梅のした風

隣梅◆　実隆

わか物とうへても梅のかはかりそ　にほはんやとの花の中墻

梅欲散◆　政為

よそにてそうきねはしらんなには舟　こゝそとまりと梅かかそする

柳垂糸◆　資直

春風にみたれぬほとも青柳の　いとはかなけにむすふ露哉

河柳　実隆

さほ姫やくり出すさほの河風に　かけて手引の青柳のいと

堤柳◆　政為

跡とむる雲もありけりやなき陰　せき入てもらぬ水のつゝみは

水郷柳◆　済継

朽のこる河への村の柳原　わか世の春に誰かうへてん（け）

村ゝ◆　公条

舟さしてとはゝや水も緑なるむかひの村にもひく青柳

門ゝ　為孝

眉ひらく柳にしるしさしこもる　葎の門も春やとふらん

故（古歟）ゝ◆　公瑜

朽のこる春の柳のあさみとり　風にしらるゝ枝そすくなき

春雨　実隆

ふるからにきえなんとおもふ嶺の雪の　雨に色そふ暮のさむけさ」四

政為　政為

ふるとたにみえぬはつらしさひしさは　雨にはとはん春もここんそあれ

磯春草★　資直

雪きゆる木するゑ計の春の色も　なみこす磯の松のした草

治沼春草　実隆

春やまた浅香のぬまのみこもりに　けふこそ草もかつ緑なれ

早蕨　政為

柴はこふかきねのわらひもえ出ぬ　おらぬ物とも誰にいさめん

済継

下もくの心はかりやいそく覧　谷にはよその春の早蕨

牧春駒◆　資直

雲井さへ春はひとつのいわかすみ　たち野の駒の心をそしる

花　実隆

芳野山はなこそ花の有か中に　なへての雲のうへのしら雲

政為

春や猶昔はこひん末の世に　うつろふ色の花にみえなは

済継

おしこめてそれともみよと一村の　霞そ花に心ありける

為孝

花さかり年にまれなる使をも　待えて人にまつやうらみん

公瑜

月雪のなかめも何の色ならん　花さく春に思ひくらへは

政為

いつくにていつみる花か猶さりに　思ひかへして物をはやすめん」五

済継

みつゝあかぬ光はそへと夕露の　花に程なきかけをしそ思

公条

さそはゝとうつろひそむる花のうへに　うき物思ひの春風そふく

資直

たか春の麓のちりの山さくら　雲とたなひく花にさくらん

実隆

うへをきんみし世のまゝの宿ならは　木たかき花や老もかくさん

済継

春の風ちらして後の色をたに　花の心にまかせてもみよ

資直

花といふに猶そわりなき色香もや　くはゝる春の心みゆらん

実隆

かへりこぬ昔の春の露おちて　心と花の色もかすめり

政為

たちいてし花の木かけを思ひねの　夢の枕の山風はそし

帰雁　済継

ゆく〳〵もさすか宮このさかひにや　雲井の雁の思ひみたるゝ

ゝゝ消霞◆　公瑜

しはしたに見はてぬ雁の面影を　霞の外に残す声〳〵

ゝゝ幽　資直

朝ほらけ見えし名残の夢路より　とをくもゆかて帰かり金

遠近帰雁◆　雅連

つれてこし雁のゆくゑはしら雲の　をくれてかすむ跡の一声」六

湖ゝゝ　実隆

ひとりゆく雲井の雁のおもかけも　かすみに残るしかの浜松

浜〻〻◆　政為

わかれてはなにをかたみの浜風の　をいてもしらぬ雁かへるらん

三月三日　公条

から人の跡をうつして雲のうへの　花をひかりのけふのさか月

桃花　公瑜

さきそめしいく世の春をうつしきて　なるてふ桃の色をそふらん

◆　資直

うすくこくはなのなさけもさく桃の　遠近かすむ宿の夕くれ

春月　雅連

山のはのかすみやいくへいつるとも　みさりし月そ空に深ゆく

実隆

みとりそふ月のかつらのかけよりや　なへてこのめもたちそふるらん

政為

春の色に人はめつとや月はたゝ　思ひたかへて猶かすむらむ

元長

つもりゆくよはひもつらし年をへて　月やはさのみかすみそふへき

済継

くまもなくみえつる影をたつねきて　露さへかすむ春の夜の月

資直

春の夜の枕の月もみるあとや　みしかき夢のゆくゑとふらん

春曙　実隆

なかめきておもふにも猶ゆくゑなき　物は雲水の春の明ほの」七

済継

程にしとなかめやわひんあけほのゝ　春を一夜の空になしても

政為

たか世よりなかめかそめしゆく末の　いま身におしき春のあけほの

沢春雉◆　資直

おり立て妻恋すらしから衣　すそのゝ隙に雉なくなり

雲雀落　実隆

夕ひかり水なき空にあかりても　かへる草葉の床や露けき

喚子鳥　政為

山水ををのかこたへとよふこ鳥　なくや春日をくらしわふらん

◆　済継

さそはれてなれもやまよふ喚子鳥　をの山ひこの声のゆくゑに

苗代　資直

民もみよまたあら小田のなはしろに　すめはすみける水の心を

籬菫　実隆

すみれさく籬は山とみえすとも　一夜の露のやとりとらまし

山吹　政為

春の花とみる影とめよ吉野川　さく山吹はあらぬ色かな

済継

おるたひの花にこほるゝ山吹の　露のしつくやゐての玉水

山躑躅　実隆

ましはとるさ山のつゝし村〳〵の　ふるえにさける花のあはれさ

浦〻〻◆　政為

浦風に浪よる松の下つゝし　たへてたく火の色もつれなし」八

藤繞菴◆　済継

春をへて猶うちそへよ松の戸に　たれをかまたんさける藤かえ

泊藤◆　資直

くれてゆく春の舟出も藤なみのかゝる汀にたちやとまらん

暮春風　実隆

暮てゆく春を山路にたつぬれは　水のまに〳〵風そふきける

〻〻雲　政為

なへて世は春ゆく雲（空）に物そおもふ　雲のはたては霞はてゝも

山家暮春◆　済継

たか春になかめてか思山さとの夕もおなしけふの名残を

坂〻〻　公条

名にしおはゝさきてとゝめよ藤しろの　みさかをこゆる春はありとも

三月尽　資直

行春よあすかへりこん道にても　先おもふへきけふの名残を

〻〻暁　雅連

あけぬとて年をむかへし鳥かねの　さも別ちにつらき春哉

首夏　済継

朝霞けふはみとりの夏山に　猶たちとまる春もこそあれ

余花　資直

春の中はさきのこるへき梢とも　見さりし花をとふ山路哉

新樹　雅連

花の色にみしはいつれの梢とも　わか葉や夏の匂なるらん

卯花　実隆

ふるまゝに色そふ雨のまかき哉　卯花くたす名にはたてとも」九

政為

み山木のおほへるかけの卯花は　もらぬひむろの雪やみすらん

済継

雪の色にうつもれてこそ卯花の　かきねはそれとあらはれにける

郭公　資直

しのふへきことわりをたにきゝはてん　猶なのりせよ山ほとゝきす

雅連

したはれし心の花の色も香も　うつれはかはる郭公哉

実隆

しのひねは名をゝし鳥の池水に　あらぬ雲路のほとゝきす哉

政為

人なみに待えてきゝし一声は　猶あはれそふほとゝきす哉

資直

思ひわひいかにねしよの郭公　またぬになして過かしつらん

実隆

わすれすはこの世の外も契りをかん　やみち夜ふかき山ほとゝきす

政為

雪ふかき山にかへらは郭公　したふにはれぬ思ひをもしれ

済継

いつの世にかたらひ初て郭公　つきぬ契を猶うらむらん

為孝

雲にきゝ雨にまきるゝ一声の　名残は夢の山時鳥

資直

心ありて月も問くる槙の戸に　たゝあたら夜の郭公哉」一〇

実隆

橘

九重やみし。（世）はかりの昔をも　いまは忍の軒のたち花

政為

みぬ世をは夢にもかなと待し夜の　匂にあくる軒の橘

牡丹　　済継

春をゝきて時なる色やふかみ草　花にさかゆくかけもみえつゝ

五月五日　　公条

池水になかめし物とあやめ草けふは袖にもかゝる涼しさ

菖蒲　　資直

あやめ草なかきね覚に秋の夜も　かゝる枕の露やなるらん

公瑜

夏の庭の花の色なき夕風に　あやめすゝしく匂いけ水

実隆

けふも猶かくてやみましやり水の　汀のあやめ影のすゝしさ

早苗　　政為

とるあとは緑にはるゝ水の上に　さなへふしたつ影そくもれる

済継

露の間に田向のさなへふしたちて　あらはにみえし水影もなし

五月雨　　資直

雲路には足もやすめぬ五月雨に　遠かた人そかよひたえぬる

済継

いるゝ日ををちかた人の隙にも　待程すくる五月雨の空

実隆

ふりすさむしはしのひまも五月雨の　雲はかきりもみえぬ空哉」一一

政為

とちはつる雲はうきたる色もなし　我世にいかに五月雨の空

照射　　実隆

秋かけてたのむる妻もいかならん　ともしを鹿の身の思ひにて

蚊遣火　　政為

あさ夕のけふりもさそなかやりたに　夜たきわふるしつかふせ屋は

夏草　　済継

茂そふ夏は人まね八重葎　いつかはとちぬやとゝみえける

瞿麦　　資直

離てははかなき葉にもむすひけり　花にをきあまるなてしこの露

実隆

なてしこは朝夕露をたらちねの　かゝれとてこそ程をまきけめ

夕顔　　政為

物ともうつろふ露も夕顔の　花のうへにそをのかまゝなる

蓮　　済継

風ふけは匂のみかは蓮葉の　うへはつれなき露ものこらす

夏月　　資直

すむ月の氷をしきて涼しさも　空にまかする庭のやり水

実隆

冬の夜の霜をや月にかさゝきの　声する峯の月のひかりは

政為

月よきていつれはあくる名のみして　身にはいかなる影のすゝしき

蝉　　済継

秋の色をそへてやつゐにしほれまし　木すゑの露の蝉のはころも」一二

蛍　　政為

蛍のみもゆとやみえてしほるらん　夜ふかき露の草の袂は

資直

陰ふかき蘆のしけみの下水に　先くるゝ夜をしる蛍哉

泉　済継

手にむすふ泉の。水のしつくにも　しのたの杜の露はかけゝり

納涼　資直

すむ人はすゝしやめ(と)てもたちよらす　夏なき里の山のした水

晩夏　雅連

てにむすふ水のなかれてゆく年も　けふそ夏なきくれに成ぬる

六月祓　実隆

御祓川ことしもなかはゆく水の　かへらぬ浪を袖にかけつゝ

立秋◆　政為

露の身はたのまさりしをあさちふの　かけをもかれす秋はきにけり

◆　済継

袖の上に音つれそめてから衣　立日しらするけふの秋風

遠郷早秋◆　資直

みそきせし川よりをちの松風に　とはれぬ里も秋はきにけり

閑居早秋　雅連

すむほとも見えさく(ら)まし(と)をさす門の　心もしらぬ秋やきぬらん

早秋扇　実隆

いまよりの風につけても閨のうちの　扇や人の秋を恨みん

七夕扇◆　為孝

年をへてならす契に七夕の　扇はいつの秋をしらまし」一三

ゝゝ舟　済継

銀河年のわたりのわたし守　いくたひけふの舟出しつらん

ゝゝ糸◆　資直

かた糸のくる夜はとをしたなはたの　秋にはあはぬ秋のちきりも

簷荻

吹かへす荻の末葉のさ夜風に　しのふの軒のひましらみゆく

荻似人来◆　政為

荻にふく風にはあらぬをともうし　人にしのはん道はなけれと

独聞荻◆　済継

待わひてわれもおきふし荻のはの　露は袖なる秋のさ夜風

荻破夢◆　為孝

さそひつる夢もこゝにやことすらん　よそには過ぬ荻の上風

初萩◆　資直

いつの間にうつろふ色そさく萩の　はつ花すりのころもへすして

岡萩　実隆

かりのこす人に心の花もありと　岡への萩の秋にこそみれ

朝ゝ◆　政為

ま萩たに思ひしれる(は)やあさな〳〵　花も古枝のわきて露けき

女郎花　資直

契をくもあたし野風にさそはれて　露にわかるゝをみなへし哉

色香をはさらにもいはす花の名を　おもふもあたの女郎花哉　実隆

女郎花おきふしなひく心より　たか秋風を又うらむらん」一四　政為

蘭　済継

春にさくおなし浪にも紫の　匂はこゆる藤はかま哉

行路薄◆

たか袖をしたふならてもしのすゝき　道のかことの露はかけゝり
古砌薄　実隆

花すゝきうへしやいつのなきたまを　まねく袖とも残る野へ哉
薄散◆　政為

ひきとめぬ袖の別の名やたゝん　あさ風さむみおはなちるころ
苅萱　済継

秋の野になにそは独かるかやの　離てあしき名をも思はぬ
路浅茅　公条

秋そととてさくへき花の色もなし　誰かは問はん野への浅茅生
槿不待夕◆　資直

いかならん色をかそへん夕露に　残してみはや朝かほの花
露深　実隆

はらひあへぬ袖におもへは秋の露　草木はさてもいかにこたへん
露如玉◆　政為

うら人もひろはぬ玉と露そをく　磯うつなみの跡のむら草
露脆◆　済継

夢は猶むすひそとめしかり枕　をさゝか露の今朝の秋風
虫声滋◆　為孝

数〳〵に物（身）をしる秋のあはれをは　思ひおもはす虫やなくらん
庭虫◆　資直

わか宿はまつてふ名さへなく虫の　こゑほのかなるきり〳〵す哉」一五
旅宿虫　実隆

故郷の夢をもなにか松むしの　こゑにかりねの友をまかせて
虫近枕◆　政為

秋かせのまくらさへうきうたゝねに　なきよる虫も心あらなん
ゝ怨◆　済継

霜さむきよるのうらみのきえかへり　朝の露に残る虫の音
杣鹿

宮木ひく声もしかこそ秋きては　山とよむまて空にきこゆれ
林鹿◆　政為

かけくるゝかた山林鹿そなく　妻こめぬとはねにもたてしを
田家鹿　済継

小田の庵にさるしかるへき夜な〳〵を　しゐて友なふさほしかの声
秋夕　資直

うき身をもわすれてかこつことはりの　心にもあらぬ秋の夕暮
雲霧　政為

雲霧を心にわくる色もなし　身はきえかへる秋の夕暮
おもふにもかなしかりけりなにをして　ことしも秋よけふも夕よ
秋風　実隆

松杉の木の間をいつる山風も　みぬ色ふかき秋そ身にしむ
月　済継

雲まよふと山の松に声すなり　月待くれの荻の上風
あくかるゝ心にとへは秋の夜の　月ともはてはさためかねつゝ」一六
資直　済継

ほのかなる初秋風の木の間より　いく夜の月の身をしほるらん
実隆

政為

よな〳〵もめてしはなにそあかなくの　月をはまれにみる心ちして

八月十五夜　資直

秋はたゝこよひの後もすむ月の　空の半の影やしたはん

月　政為

をきあまる月のかつらの白露や　やとるもとをき袖ならすらん

済継

水のうへ露のそこにはくもる夜も　すめる心を月や問らん

資直

なかめても心あるへきわか身をは　おもはぬ月の空に深ゆく

実隆

したへとも雲のみおなる月影に　袖のうへゆくあさの川なみ

雁過湊◆　済継

雁はなをよるの波路もいそくらむ　このみなとをもなきて過ゆく

ゝ作字◆　公瑜

くる雁のをのか数かく玉章や　跡なき雲にまきれゆくらん

ゝ似櫓声◆　資直

からろおす浪ちの舟もとをさかる　雲井の雁の声にまかせて

馬上雁　雅連

駒とめて猶やすらはんひさきちる　浜辺の雁の声にまかせて

朝暮雁　実隆

今朝きなき旅なる雁は夕暮の　やとりを誰にわひてとふらん」一七

左右聞雁◆　政為

枕にも跡にもをくれ雁の声　とてもさそはゝ四方の山風

霧　済継

明ぬとておき出る道の行末の　また夜ふかき夜や秋の朝霧

駅霧◆　為孝

すゝか山また夜を残す霧のうちも　ふりかへてゆく道はまよはし

水郷霧◆　資直

みるうちのけしきそかはるあすか川　霧の渕瀬をわくる秋かせ

崎ゝ　実隆

おきつ舟いさゆくさきもいかゝさき　いかゝわくらん霧のまよひに

潟ゝ◆　政為

なにはかた風にまよへる秋霧の　まかきをこやのあしのやへかき

九月九日　公条

九重にさきいつる色もなか月の　けふのためなるしら菊のはな

紫菊◆　資直

くたけちる匂もふかしむらさきの　ねすかの衣きくのうへの露

海辺菊

なへて世の霜をもまたしなみ風の　吹上さむき秋のしらきく

池ゝ◆　政為

さく菊は老せぬ花の名に立て　さゝなみかほる池ふりにけり

擣衣稀◆　済継

いまはとも思ひたゆまぬつれなさの　ひとりしられてうつ衣哉

風前擣衣　公瑜

秋風をいとふ為とてから衣　うつも身にしむ声とこそなれ」一八

聞ゝゝ　資直

暮わたるあまのとまやの秋風に　さもうらかなしころもうつ声

南北〻〻◆　雅連

朝夕に吹かはる風を山ひこの　こたふる谷にうつ衣哉

閑夜擣衣　実隆

それとなき礎の秋のさ夜深て　物にまきれぬね覚をそしる

擣衣不眠◆　政為

うきわさを思ひあかしてうつ衣　よるのねふりも身をや知らん

九月十三夜◆　済継

秋の夜は今夜そさらに長月の　名におふ月に心あるへき

月　資直

秋をへてなれしかたみも露霜の　ふかくかなしき袖の月影

済継

浅茅原するはの秋の露霜に　月もいまはの影そすくなき

雅連

心とめて野にも山にも秋の月　なかめをきてや面影にせん

親栄

露霜をはらひかねたるさ莚の　ねぬ夜の月に嵐ふく也

実隆

はかなくやめてこしはては身にちかき　山のはをたに月に忘れん

政為

夏のよの霜もまくらにきえあへぬ　真砂の月の末の秋かせ

田鳴◆　資直

小夜嵐いなは吹すく秋の田の　ほのかに成ぬ鳴のはねかき」一九

夕鶉◆　雅連

身にそしむ哀むかしはたかさとの　夕を野へに鶉なくらん

故郷〻　実隆

たか秋の思ひの末を故郷の　野へのうつらに残してかなく

岡葛◆　政為

さをしかの出にし跡かかた岡に　かたよるま葛色そ暮ゆく

松葛◆　済継

秋の露にづれなき松をたのみても　したはふ葛の色はみえけり

墻保葛◆　公条

しくれつる墻ほの露に秋の日の　夕かけのこす葛の紅葉は

紅葉浅　実隆

松杉の木のまをいつる紅葉〻は　たゝ一しほもふかき色哉

〻〻一樹◆　政為

よそめにはなにの紅葉もわかさりき　ひとり秋しる秋の木かくれ

紅葉遍◆　済継

うすくこき外にのこれる色もなし　紅葉や秋の四方のときは木

〻〻色〻◆　公瑜

うすくこく時雨〻山の紅葉〻に染やらぬ松の色もめつらし

紅葉透松◆　資直

をとにきく秋はかりかは松風の　吹わかる嶺の木〻の紅葉〻

関〻〻　実隆

あはた山うちこえみれはあふさかや　こゝをせきなる秋の紅葉〻

連峯〻〻◆　政為

露霜にけふはいくへの嶺こえて　わくる紅葉もあさくやはみん」二〇

岡〻〻◆　済継

もみちにそあけて色こきかた岡の　あしたのはらのよるの時雨は

嶋〻〻◆　資直

しくれつるおきつしま山雲はれて　海のみとりをそむるもみちは

暮秋　実隆

とゝまらぬ木のはも露もいくたひの　秋のうらみの数と成らん

霧　政為

名残あれや猶たち残る色もうし　霧吹はらへくるゝ秋かせ

暮秋送客◆　済継

ゆく秋にわれもをくれぬ二道の　けふの心そわ人れもまよへる

〻〻遠情◆　為孝

とはゝやなくれゆく秋を思ふには　遠かた人も袖しほるらん

幽栖〻〻◆　公瑜

さしこもるむくらの宿も秋や又　さはる方なく暮てゆくらん

九月尽　資直

くるゝ日もけふはとをかのしもとゆふ　まさ木のつなのなか月もなし

初冬　為孝

秋かせの身にしみきつる色かへて　けふ木からしの名にや立らん

公瑜

山風の道もさりあへす吹はらふ　木のはや冬をさそひきぬらん

資直

山風も今朝は中〳〵のとかにて　おもふにも似ぬ冬の空哉

雅連

秋はゝや夜の間の露のおきていにし　あすかのさとに冬やきぬらん」二一

時雨　実隆

しゐてふる時雨よ嶺の常盤木よ　心くらへのはてをしらはや

政為

いつしかと雲そしくるゝいくたひか　秋の思ひの袖は過けん

済継

ほしあへぬ梢の露の夕日影　時雨にのこる空も寒けし

公瑜

ふりそふもあはれとそ聞村しくれ　木のは残らぬ四方の嵐に

資直

時雨のみさためなきよとなかむとも　あはれなるへき空のけしきを

実隆

さよしくれあはれほとなき軒はにも　雲ゐの月の影たのみつゝ

落葉　政為

くれなゐにあらぬ木のはのちる跡は　よしはらふとも風にまかせん

済継

ちりしきて朽ゆくまての木のはにも　跡やはみゆる山の下道

霜　資直

うちはらふ袖たにたへぬ霜の夜の　ことはりしるき鐘のこゑ哉

雅連

よるも猶ゆきゝとたえぬ橋の上に　たゝ今朝の間の霜そかゝれる

残菊　実隆

霜に猶色そふ菊をいにし秋も　こゝろやすくや思ひをきけん

政為

神無月花もおりとを人やしら菊の　春につれなき雪をみすらん」二二

寒草　元長

思ひやる心はかれす野への草　あさ夕霜のむすふ色まて

済継
あかさりし秋の心や冬かれの　お花かそてになをのこるらん
氷　実隆
かけひゆく音こそあらめおちたまる　もとの水さへ今朝こほりつゝ
政為
ぬるかうちにこほるならひを忘ては　よとむとそきくよるの水をと
済継
窓の中によるのあらしはしらさりし　硯の池も今朝こほりつゝ
冬月　公瑜
あたら夜といひてもさむき月かけを　いかにむかひてなかめあかさん
千鳥　資直
あちむ(ら)しのさはく入江をなき立て　尾上をこゆる夕千鳥哉
実隆
とゝめをく跡も千とりの和哥のうらに　はまの真砂と契る行末
政為
さゆる夜はつまをへたてゝなく千鳥　うき世のなみに物思ふらん
済継
わすられぬいかなる友そ小夜千鳥　又うちわひてひとり行声
資直
あはれいかに昔の跡はみなせ川　かはらぬ音をもなく千鳥哉
水鳥　実隆
山河や落葉にあそふ水とりの　あしのいとなき嶺の木こらし」二三
政為
うかへるをゝのかわさなる水鳥の　身はいたつらにこほるせやうき

網代　済継
網代守床の霜夜の心もや　おなし契の宇治の橋姫
雹　公瑜
雪とちり雨とふりきて中空に　雲(吹)。まよふ風のさむけさ
霰　資直
とのもりも朝きよめせは心あらん　よるの霰の玉しきの庭
鷹狩　政為
かり衣すそ野のおはなかれはてゝ　さ(ま)かふ色なき袖やみゆらん
済継
音になくも狩場の小野のをのつから　かくれぬ鳥の思ひなるらん
五節　為孝
乙女子の代ゝにかはらぬ面影や　昔をかへす袖(と)をみゆらん
公瑜
おもかけや昔をのこす雲の上に　天津おとめの袖をかへして
神楽　資直
わすれめやまゆみつき弓つきもせす　おもしろかりし夜半の神かき(わさ)
雪　実隆
よるの雨の雲ゆく嶺の朝日かけ　都にしらぬ雪をみる哉
済継
われも又とはぬはおなし雪のうちに　またれぬ人も忘やはする
資直
山川のこほらぬさきにふるほとや　冬も雪けのみかさそふらん」二四
実隆
にほひなきうらみはのこる雪なれや　柳か枝の花とさきても

政為

人はいさわれもとはんと思ひこし　心は跡もつけぬ雪哉

済継

身はゝやく思ひきえてもたへさらん　まつたつ山の雪の下庵

資直

つもれ猶まつとてくへき友もなし　心はみえつ庭のしら雪

実隆

この本よ光もあれなえたの雪　心のやみの身はふりぬとも

炭竈　政為

すみやきのいのちかけたる煙をは　くゆる思ひのたくひにはみし

仏名　資直

さゝ竹の大宮人そとなへつる　みよの仏の御名ときくより

歳暮　実隆

おほえすやことしもあたにこゆるきの　いそかぬ老のなみをかけまし

政為

たちかへりくるゝもおなしことはりよ　さりとて年をしたはすもなし

除夜　済継

一年の夢はいく度さめぬらむ　けふの今夜のうつゝはかりに

初恋　済継

人しれす思ひかへさむ道もかな　われのみすゝむ心ひとつを

為孝

あさからぬ心の色ははつしほの　袖ともいはむ涙ならぬを」二五

忍恋　公瑜

人やとふわれやもらすとあちきなく　忍ふるほとの心つくしよ

資直

たへて猶しのにさりけんくやしさも　いつしらせてか歎そへまし

実隆

心よりあまる思ひは中〳〵に　いふにもまさる色やみえなん

不見恋◆　政為

あかすともみてややみなん心をそ　わか身にかくる契なりける

不逢恋　為孝

あふくまにあらぬ袖ゆく涙川　いかてか人のかけもとゝめん

資直

いかにせん思ひそめしはわれからの　うきになしてもつらき契を

見恋　実隆

しられしなあやなくけふの思ひより　おもかけにのみなかめわふとも

聞ゝ◆　政為

笛竹のうきふしをたに今は身に　きゝすてかたき伝ならすや

祈ゝ　済継

祈とも神のむすはぬ下紐や　つゐにとけぬをしるし成らん

契恋　資直

大かたの秋やはたのむことのはの　かはせる枝に色はみえねと

憑恋　実隆

一すちにたのむをみては偽に　なしはてさらむけふのことのは

待恋　政為

待ふくるわれもこよひは中空の　月はや物を思ひあかさん」二六

逢ゝ　公条

恋にてあひみるにしもゆく末の　このむにかたき契をそおもふ

済継

たのまれぬゆくゑを人におもふとも　いかにつくさむけふのことのは

後朝ゝ　資直

わりなしやたゝけさのさのへたてゝも　猶いとゝしき思ひそひつゝ

雅連

あさ露のおもはん空よしほれしは　今夜にかきるたもとならねは

実隆

立かへりたのむ夕もひをむしの　たくひかなしき今朝の空哉

政為

けさは又それもいかにとまとふ哉　思ひしよりもとけし心を

別ゝ　済継

しほれてもこのあさ露の袖の上や　せめてかひある名残成らん

資直

此まゝにさゝぬわかれのためしにも　なりぬはかりそ思ひみたるゝ

顕ゝ　実隆

霜の後の松を思ひのはてもうし　みさほつくりて過し心に

近ゝ　政為

なかめやる軒はやつらきつまならん　我にをとせぬ松風そふく

馴ゝ◆　済継

かさぬへき契そしらぬなつ衣　そらなくなれてみゆる物から

◆　公条

へたてこし思ひはさそなそとまれぬ　中にもつらきふしはある世に」二七

為孝

おなし江にさすかともなふ水鳥も　へたてぬ波やしたにくるしき

遠恋　実隆

おもひせく湊は袖のこゝなから　もろこしはかりとをつ舟人

政為

雲かすみ分つくしてもかひやなき　心の花のうつろふとみは

尋恋◆　済継

そことみる木すへもあれと行道に　心をたとるみわの山本

偽恋　公条

玉つさのたゝ一筆の中にたに　まことしからぬ言のはそうき

不憑ゝ◆　資直

ゆく末の身にたのむへき契には　たかいつはりのなき世成とも

厭ゝ　実隆

うらみしな身はいとふへきことわりも　人こそふかく思ひしらすれ

悔ゝ◆　政為

あやにくに思をいとふ人心　いまくゆる身をことはりやせん

◆　済継

おもふにはありしなからのわか身とて　みすしらぬ世もかひなかるへし

変ゝ　資直

かはらしといひしにたかふ一ふしは　うらみ所のあるかひもなし

公瑜

さためなき心はうしとみるはても　又やかはると猶たのむ哉

隠ゝ　実隆

たとりきてたのむふせやもかひなきに　我そかへりてきゆるはゝ木ゝ」二八

◆　政為

わか袖のしくれをしらぬ月はなと　こよひもよそに雲かゝるらん

稀ゝ　　済継

一度はわかをこたりになしはてゝ　おとろかさても心をやみん

為孝

めくりあふおりをやせめてたのまゝし　七夕つめにあらぬ契も

片ゝ◆　　公瑜

かす〳〵にいひても誰をかこたまし　うきもつらきも人はこたへす

◆　　資直

思ひしるそのなに事かいつの世の　いかなるをりをまたんとすらむ

久ゝ　　政為

つらかりし此とし月をもろ友に　思ひ中にをくらましかは

元長

契をは神そしるらんすみよしの　まつをいく夜とかそへこしまて

済継

みそめつる契はかりになからへて　ありふる世たにかたき心を

忘ゝ　　公瑜

人はなとさしもつれなきうき物と　思はてゝも我は忘れす

資直

をのつからわすれぬへきをへたて行　心やなにのよその年月

実隆

うちとけす過しもうれし程もなく　かくよそ人になるにつけては

怨ゝ　　済継

心とも思ひすてつるうき許に　たかなくさめの猶またるらん」二九

絶ゝ　　資直

のこさはやしゐてありへんたのみたに　いまはたえての後のかたみを

実隆

ゆくゑなき夢のわたりを恨ても　身のうき橋をなにゝかけまし

政為

われをこそ思ひたえねと祈こし　心かへして人そかれゆく

寄月恋　　資直

なかめすやわか涙のみつれなさの　ならひもしらぬ有明の月

ゝ霞ゝ　　実隆

立そめしうき名のはてよ空にみつ　霞をみるもひまは有世に

ゝ煙ゝ　　政為

待そらにたつやけむりはうき名をも　さそひやすらむやとの夕暮

霧◆　　元長

さらに又へたてもはてすうす霧の　たえまをきけるうきちきり哉

露　　済継

たかならぬ心の秋の夕露や　わか袖ひとつ求きぬらん

山雨*　　資直　*「雨」字、斜線ニテ抹消サル

なをさりにはらはむ袖の露にても　猶かゝるへき岩のかけちを

寄岡ゝ　　実隆

人はいさゆきゝの岡の名のみして　おもふあたりのことつてもなし

谷◆　　政為

はらふへきたれをたのまん人しれぬ　谷のかけくさしける思ひは

野　　済継

あたにみて分る花野の色にたに　思ひうつろふ人のこゝろを」三〇

路◆　　為孝

さすかそのあはれとしらん心をや　我おもふ道のしるへにはせん

池　実隆

きかれすはかひやなからん耳なしの　池よりふかき恨なりとも

河　政為

冬川のうへにもみゆるわか恋は　こほらぬ水をせく袖もうし

海　済継

みるめかる浪にもぬれぬあま衣　とをきみきわに朽やはて南

江　為孝

みせはやなほり江の水も床の上に　ひとり玉しく夜るの涙を

泊◆　資直

わか心思ひ入ぬる海はあれと　とまりもしらぬとをつ舟人

里　実隆

すむさとは遠つあすかの夢にても　みえよやくへきよゐの面影

家◆　政為

みるめあらはたつねもゆかんおもふこそ　浪のちさとのあまの家しま

床◆　済継

独ねのとこのうへ行山川は　いさやさはかりせくなみもなし

墻◆　公瑜

折〳〵にとはすは何をあしかきの　まちかき中のしるしともせん

庭◆　資直

夢にもといひしちきりはみぬ世にて　むすはぬ露のよもきふの庭

草　実隆

したにかよふ道もやたらん里人の　ことは夏野のわらひかねつゝ」三一

竹◆　政為

独ねにきえかへりきて音もらし　心よはしや雪の村竹

寄忍草恋◆　済継

しけりてもかひなく露はもりにけり　あはぬ板間のしのふもちすり

ゝ累葛ゝ◆　資直

かけてやは思ひしみちのつゝらおり　くるしきまてに恋ん物とも

木　政為

つれなしと我をも見すやかくてふる　身の秋しらぬ槙もひはらも

柏◆　済継

本かしはもとみし物のなからへて　ふるからをのゝふるとたにしれ

杉　公条

いまは世にふるからのへにたつ杉の　又もあひみん道もたのます

椎　資直

故郷や涙のこらん草枕　椎の葉さむき夜半の嵐に

槻　雅連

はつせ山いのるたのみもつきの木の　うつろひやすき色にみしより

梨　実隆

うしとても行かくるへき山なしの　身はいかさまにならんとかしる

鷲◆　済継

さのみやはいかゝなく音をつくはねに　すむてふわしの恋わひぬとも

山鳥◆　資直

わか中よとを山鳥もよるのみそ　へたつるねをはなくときゝしを

鴛　実隆

ひとりぬる夕もしらてをし鳥の　我につかはぬ心さへうし」三二

鴫◆　政為

深にけりかす〳〵人のたのめしも　身にあやしきのよるの羽音は

蜻◆　　済継

夢とてもわれやはみゆるかけろふの　あるかとたにも思ひ出すは

蝉◆　　資直

問人もさらは夏虫夕くれを　おとろかしてはなかすもあらなん

松虫　　実隆

とへかしな名にはたかひて松虫の　命はかなき身の露のまを

鈴虫◆　　政為

手枕に声も露けしすゝ虫の　ふるさるゝ身は思ひしらしを

衣　　資直

から衣うらみも色にはて人は　はや月草に思ひそめける

布　　実隆

紅よいかにをさへん手つくりの　さらせる色にかはる涙は

鐘　　政為

たれゆへそくもれはかはる影もみつ　いつわりなしとむかふ鏡も

笛　　済継

むかし思昔よいかにふえ竹の　おなし世をたにしらぬちきりに

弓　　資直

せきとめぬよそのうき名のたつる弓　心つよくもつゝみはてなん

枕　　実隆

身をかへて歎くためしも同世に　ふかき枕を忍へしやは

莚　　政為

しらせてはうさやつもらんいたつらに　塵はらふ夜の床のさ莚」三三

鐘　　済継

しつかなる涙もよほす鐘の声に　うつゝの夢をたれしたふらん

神祇　　資直

久堅のあまの日すみの宮つくり　たえぬ契や八十むすひせし

釈教　　実隆

いひしらぬ心の外にもとめきて　とすれはまとふ法の道哉

政為

三世かけておもふ心のゆくゑなき　道やひとつに立かへるらん

暁　　資直

ふかき夜のやみふかき空のかなしきは　月みぬ秋のあかつきの空

実隆

けふも又むなしき夢の世をやへん　あか月はかり目をさましても

政為

かねの音にもよほされすはうきねさめ　しらてもすきんわか齢かは

朝　　資直

かた山のねくらやちかきこのさとの　軒はわすれぬ朝からす哉

実隆

朝な〳〵おもふもあかすをこたらぬ　道をしるへき御代に逢ても

昼◆　　政為

きけは又みなみにめくる日のかけに　今も時しる夕つけのこゑ

夕◆　　資直

雲の色もわれのみかくやなかむらん　いつも夕は秋の空かな

雅連

ことしけき我世にもあらすなにわさに　まきらはしつるけふも暮けん」三四

実隆

世中にゆくかたしらぬ心をは　ゆふへの雲にたかへてそやる

◆　政為

おもふ色にかへぬもつらしすみ染の　夕をいつの袖にみえまし

山　実隆

いつよりのまよひの世〻の塵の数　いもせの山の名にもたつらん

政為

天地のことわりしらはいもとせの　山をや山のはしめともみん

資直

それも猶なくさまなくに秋の月　みし世はいかゝさらしなの山

実隆

つくは山ふりぬる跡を尋ねしも　忘かたみのみことのり哉

政為

つもりては千世をかそへん位山　かけなひくをや松のことのは

資直

いにしへのおもかはりするなかめもや　おほうち山の春秋の空

雅連

はらひえぬ心の塵や年をへて　わかなけきこる山となりけん

実隆

はる〳〵とかもめたちたつこなからも　みえて雲ゐの天のかく山

政為

あらましの山をはふかくもとめても　しらぬ心の道しるへ哉

河　資直

うちわたす袖さへやかてひつ川や　浪のまはかり都へたてゝ」三五

政為

河そひの道はいつよりふみたえて　駒うちわたす水のしらなみ

路◆　資直

こしかたに心もひくかゆく駒も　しらぬ山路はこしなやみつゝ

関　実隆

世中よなと出かてのうき身そと　とへは心を関守にして

資直

ゆくと来る人はかならすとまるへき　心のおくの白川の関

＼実隆

あやうしと世わたる人にみえやせん　身のうきはしは朽のこるとも

。

宮こにと出たつ袖のにしきにも　めとまるけふの関むかへ哉

橋　／政為

。＊以上三首（一首歌闕）、書陵部本モ同ジ体裁也

故郷　資直

誰すみてしのふつまとも成にけん　軒はの草のしけき人めを

実隆

とし〳〵の草につけても故郷は　さもあらぬ春の色に露けき

政為

うつる世はみなふる郷をすみすてゝ　跡のみそれとみるもはかなし

山家　資直

うき時のさらにも有かな今しもは　おもひ入ぬる山ならねとも

実隆

すむとならはその山水の末までも　我身にこらぬ心ともかな」三六

政為

代〻をへし跡はをくらのやま水の　末かすゑなる袖ぬらしけり

田家　実隆

かすかなるあしのまろやの二みつ　いなはのひまにみえてさひしき

政為

湊入の舟もなからほになひく　小田もる床やあたのかり庵

松　資直

数ならぬ心のたねもこの宿に　しけきめくみの松のことのは

竹　実隆

さらてやは世にあらはれていかはかり　こゑのあやなす竹はありとも

政為

ことし生の竹もかしこき心より　わか世やおもふねさしなるらん

苔　資直

よるへなみつなかぬ舟にむす苔の　ねをはなれたる草とこそみね

鶴　実隆

浦風はさひしくも有か夕しほの　入江のたつの声もおしまて

政為

我のみとおもふを霜のつるのかみ　むかふもうしや池のかゝみに

旅　資直

行とまる宿たにまれの野山哉　さためなき世の旅にはあれとも

政為

海山は心にのこるおも影の　あらぬ身なからたちや帰らん

眺望　資直

心あらむ人は千とせをつくしても　あかすやみまし松かうら崎」三七

実隆

時しらぬ花さきちりて海童の　かさしことなるおきつしらなみ

為孝

夕日影のこる浪間にほすあみの　まつめにかゝる浦の遠しま

樵夫　資直

河上の山路のま柴はこひきて　みれは麓に小舟さすなり

漁　実隆

あはれにもひるはひねもすひくあみの　めをもあはせぬよるのいさり火

◆　政為

うきは身よあまのつりなはふかき世を　思ひしりてもいかゝすくさん

夢　資直

明かたやうつゝにちかく成ぬらん　昔の夢のかへるさの空

実隆

我なからあやしやいかにいつくより　ゆきかへりてか夢はみゆらん

政為

たらちねやたれにかはれるみすしらぬ　人のいさめし夢のたゝちは

懐旧　資直

しらぬをやむかしといひて忍らん　はしめもはてもおなしうき世を

実隆

こしかたはなにゝもあらすよしあしと　わけし心の跡もとまらて

政為

世のうさをしらぬ身にてもしのふへき　昔を何か思ひのこさん

述懐　資直

つ（本不見）つゝふりぬとはかりおもふ身を　われより外にあはれかけなん」三八

実隆

世中よすてぬ心のひくかたに　なくさめきつる身のはてもうし

政為

かくてふる身は何計事かありし世の　思出とては思ひ出まし

公条

今ははや世のことわりも思ひわく　心をならふわか身とも哉

祝　　為孝

ことのはの千いろの色もすなほなる　ためしをやとそ残してやみん

資直

おさめしる世は天地も長岡に　うつろひそめし昔をやみん

実隆

くもりなき御代にひかれて久堅の　ほしの位の道もまよはし

政為

君も君宿も宿とやとひなれん　つかへん千代の道しるへをは

（以下空白）」三九

【略解題】

本書の書誌・概要に関しては、既に、『国立歴史民俗博物館資料目録［8－1］高松宮家伝来禁裏本目録［分類目録編］』（二〇〇九・三、以下『目録』）に、以下のやうな記載がある。

侍従大納言家着到千首　三条西実隆・下冷泉政為等。文亀三年。江戸中期写、外題霊元天皇宸筆。一冊。〇四六五（る函一八八）［装訂］袋綴。［法量］二七・二×二〇・四。［表紙］黄土色地に銀色の牡丹文。［外題］侍従大納言家千首十文亀三重陽着到抜書人詠之（原・左・篆・書）。［内題］侍従大納言亭千首着到之中抜書文亀三重陽十人詠之。［本文］半丁一二行。和歌一首一行書。歌題三字下げ。［丁数］全四一丁。［備考］実隆・政為・済継・公條・為孝・公瑜・資直・道堅・元長・雅連の一〇人の探題千首歌会の抜粋。総歌数四八四首。宮内庁書陵部本（御所本、五〇一・九一八）あり。［別書名］（旧）侍従大納言家千首抜書。（前掲書・一二六頁下段）

『目録』は、成立時期を、外題・内題（書陵部本も同一本文）に基づき文亀三年とするが、井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町後期』が「但しこの実隆の歌は、聴雪集等にある実隆百首を見合せると、後者には「永正元三巳来」とあり、実は永正元年三月三日からの実隆家着到である」（一四二頁）と指摘する通り、永正元年とすべきものである。

単独百首は、実隆（『雪玉集』『聴雪集』）、政為（井上宗雄蔵「権大納言政為卿着到和歌」「碧玉着到百首和歌」）に存する。「権大納言政為卿着到和歌」は、井上・大岡賢典編『中世百首歌一〔古典文庫四二八〕』（一九八二・五）に翻刻され、同書解題に「永正元年（一五〇四）三月三日起日の実隆家着到歌が行われたことは、実隆公記にみえている（「自今日於愚亭着到和哥可詠之由張行……」）満日（ママ）は五月十四日で（この年は閏三月があった）、そこで千首であったことが記されている。後に述べることを考え合せると、十人による着到百首（合せて千首）であった」（前掲書二六七～二六八頁）と、やや詳しい考察がなされてゐる。なほ、井上『書架解体　王朝和歌から中世和歌へ』（青簡社、二〇一〇・一〇）にも井上蔵二写本の書誌の記載がある（同書・一四四頁）。

二点の井上蔵二写本の内、古典文庫の底本になつた一本（「権大納言政為卿着到和歌」）は、井上によると室町後期写で、政為自筆資料（懐紙・短冊等）と筆跡を比較するに、自筆の可能性が高いといふ。この井上一本であるが、井上は触れてゐないものの、『弘文荘待賈古書目』第

二〇号（一九五一・六）所掲の「政為卿着到和歌（大永頃古写本）」と同一のものであらうと思はれる。同書目には「冷泉家旧蔵本」ともあり、かれこれ考量すれば、井上の指摘の如く、政為自筆と見做して良いであらう。

出詠歌人は『目録』にある通り、実隆・政為・済継・公条・為孝・公瑜・資直・道堅・元長・雅連の一〇人。各々百首を詠じ、全体で千首であつたと思はれるが、一つ、不可解な点が存する。

本書墨付第一九丁裏に、次の歌が見える。

（月）　親栄

露霜をはらひかねたるさ莚のねぬ夜の月に嵐ふく也

念のために、書陵部本を以て引くと、

（月）　親栄

露霜をはらひかねたるさむしろのねぬよの月に嵐ふくなり

と、作者名は一致し、和歌本文の表記こそ若干異なるものの、同一和歌である。本書に見える親栄の詠歌はこの一首のみである。

一〇人の出詠歌人名の中で「親栄」と誤写される可能性がある人物はないと判断されるので、「親栄」といふ作者名表記を疑ふことはただちには出来ない。しかし、この「親栄」を加へると、千百首となつてしまひ、『実隆公記』の記述と相違してしまふことになる。本書が抜書であることを考へれば確言はひかへるべきかもしれぬが、親栄が十一人目の歌人として着到和歌に参じたと見ることはまづ出来まい。

この「親詠」なる人物が、歌会が行はれてゐる期間のある時、たまたま実隆邸を訪れて、この着到和歌のことを聞き及び（乃至、その場にたまさか臨席し）、何らかの事情で即詠したものが、（この表現が正しいとは思はないけれども）たまたま紛れ込んだものではないか、と、ひとまづは推定しておかう。

さてこの「親栄」であるが、文亀永正期における実隆との交渉から鑑みるに、若狭武田氏の被官、粟屋親栄と見るのが正しからうと思ふ。

親栄に関しては早く芳賀幸四郎『東山文化の研究』（河出書房、一九四五・一二）に論があり、その後も、米原正義『戦国武士と文芸の研究』（桜楓社、一九七六・一〇）、源城政好『京都文化の伝播と地域社会』（思文閣出版、二〇〇六・一〇）によつて論が深められて来た。

これらの論によると、親栄は、文亀元年（一五〇一）五月二五日に実隆邸を初めて訪れ（『実隆公記』）、以後京都に滞在して、実隆『源氏物語』講釈を聴く機会を持ち、永正元年三月から五月にかけても、しばしば実隆邸を訪問してゐる。従つてこの時期、親栄がこの着到和歌に関連して、当座で臨時に詠歌をした可能性は十分あると考へられる。

現在知られる親栄の詠歌はまことに少なく、『再昌』に見える数首にとどまるのではあるまいか。仮にそこにこの一首を加へることが出来るならば、本歌会の資料的意義の一端をここに認めることが出来ようかと思ふ。

なほ鼇頭に貼られる小紙片は、霊元院とその近臣が『新類題和歌集』編纂に際して付したものと思はれる（酒井茂幸『禁裏本歌書の蔵書史的研究』〔思文閣出版、二〇〇九・一一〕二五二頁、同『禁裏本と和歌御会〔新典社研究叢書二五四〕』〔新典社、二〇一四・三〕二〇三頁）。従つて、前掲目録では本書の書写時期を「江戸中期」とするが、江戸初期にまでひきあげても良いかと思はれる。

（釈文＝武井和人・酒井茂幸、略解題＝武井）

2 宗匠家続百首和歌

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H－六〇〇－四六三）〕

続百首和歌〈長享二／七月八日〉（外題〔題簽〕）

宗匠家続百首和哥〈長享二／七月八日〉（内題）

立春　為広卿

心のみくもりし衣の色にそみ　にほひにうつる春は来にけり

山霞　栄雅

のとかなる春のかすみの衣をは　何山姫の立かさぬらむ

海霞　実隆卿

難波かたなにはの物かみをつくし　うみよりふかき春の霞に

子日　宋世

あつさ弓引くらふれは春のゝに　すゑはるかなる松の色かな

若菜　基綱卿

雪こほりきゆる沢へのみかくれに　あらはてきよきねせりつむ也

朝鶯　正広

うちいつるこゑに岩とは明にけり　神世もかくや春の鶯

津梅　桂厚

花を世にめてこし人も難波津に　春やむかしと梅かゝそする

夜梅　栄雅

色もみすねやもる音もきこえねと　めをさましたる夜半の梅かゝ

岸柳　宋世

朝な〳〵岸のひたひにかゝるかみや　風のけつれる青柳の糸

春雨　為広卿

さほ姫や天津空にも小手巻の　いとくりかへしなかめふるらん

春月　実隆卿

月にあかぬなけきは秋のさやかなる　空たにあるを春のあけほの

栽花　桂厚」一

色もかもうつしうへをく庭の花　はなもわするな行すゑの春

翫花　栄雅

かさすには惜む心やまけぬらむ　おもひわひてもたをる花かな

惜花　宋世

ちるきはにしたふ心よあやにくに　花見ぬ春の日をは送れと

春駒　為広卿

ちるといへは老ぬる馬もこまかへる　心の色や野へのわか草

款冬　実隆卿

これのみや春のかたみと鶯の　なく夕かけのやまふきの花

紫藤　基綱卿

あかすみる心千尋の藤なみに　花のうき世の色そあせゆく

暮春　正広

雲となり雨とふるとも形見かは　下葉はとまれ夕くれの春

首夏　桂厚

はなの香も染し衣も夏のきて　うすきにとをる袖の朝風

更衣　栄雅

小莚にかたしく袖も立かへは　春のわかれやうちの橋ひめ

卯花　宋世

をのゝえはよそにてきゝしうつ木原　このころくらす花の雨かな

郭公　為広卿

あきし世の魂のゆかりと思ふにも　猶うとまれぬ山ほとゝきす

砌橘　実隆卿
ほとゝきすをのかとこよの梢そと　うへしはしるや庭のたち花
早苗　基綱卿」二
みなと田や海のはまもをかる海士も　おなしみとりの早苗とるらし
沼蒲　正広
何をさて沼のあやめのなかきねの　なかきためしもひきそわかるゝ
梅雨　桂厚
五月雨に水かさまさりて早川や　くたけておつる滝の岩波
夕立　栄雅
ゆふ立の跡の山かせ又おちて　ひとしきりふる露の木の下
夏草　宋世
みま草にしけりてかりそな秋まちて　露かふむしのやとりとそなる
夏月　為広卿
秋たにもあかぬ心にくらふれは　何そは月のみしかよのそら
瞿麦　実隆卿
ちらすしてさきつくよりやとこ夏の　久しき花の名にしおふらん
氷室　基綱卿
年さむきときはのかけの松か崎　夏のひむろももりやそめけん
納涼　正広
松か本岩まの水にまとゐして　花こそなけれもゝのさかつき
夏祓　桂厚
をちこちやいく里人そ御祓川　こゝろきよむる袖のゆふなみ
早秋　栄雅
老か身のあかつき思ふ秋はきぬ　またなかゝらぬ夜半にねさめて

七夕　宋世
今一夜ねてもゆかなむ天のかは　このほし〳〵のなかのたなはし
稲妻　為広卿」三
うつりゆく世のことくさの白露に　あたくらへするいなつまのかけ
籬荻　実隆卿
ぬれつゝもそよきにけりな露と風　あひやとりする庭の荻原
野萩　基綱卿
真萩原鹿の音さむく露ちりて　色にしくるゝ野への秋風
路薄　正広
河内女かこれや手染の糸すゝき　露ふきみたす秋しのゝ里
暁露　桂厚
秋さむくおきいてゝみれは有明の　月に玉ちる浅茅(ママ)の露
隣槿　栄雅
うへてみる人も来てみよ旭さす　まかきの面にのこるあさかほ
葛風　宋世
秋風にうつろふ比はまくす原　花もうらみてちるかとそみる
夕鹿　為広卿
うき雲はしくれてかへる山ちより　出て夜をまつさをしかの声
初雁　実隆卿
契るともかはかりこそは待へけめ　秋をたかへす雁のくるこゑ
叢虫　基綱卿
こぬ人を音になくむしにかこたせて　住もあさちの宿の露けさ
崎霧　正広
ほともなき霧の戸張の明る夜に　又もおほふやほしさきの秋

嶺月　桂厚
秋毎に住のほる月を鏡にて　くもりなきよの峯のまさかき
湖月　栄雅」四
舟人もしらぬおきなかかゝみ山　かけなる浪の月をもてきて
関月　宋世
出やらぬ今夜の月の宮人は　岩戸のせきに名をやとむらん
浜菊　為広卿
はま松は音のみたかき浦波を　色にみせたる花のしらきく
擣衣　実隆卿
うつ袖もさこそはせはき草の庵に　すむ身のための衣なりせは
黄葉　基綱卿
さほ山の梢はいまたみとりにて　はゝそはかりのよもの初しほ
暮秋　正広
うき物といとふに秋やいなは山　よし立かへれ松もこそあれ
初冬　桂厚
落葉する風のたよりを今朝は先　空にしらせて冬やきぬらん
時雨　栄雅
ゆふつく日さすや外山の槙の葉に　片枝しくるゝ色そさひぬる
落葉　宋世
山風やよその紅葉を柏木の　梢もあらぬ色にいてぬる
枯野　為広卿
冬かれの色にもみてよもえ出し　はきの黒葛末つゐのよを
寒蘆　実隆卿
たつのなくしものいく夜をかさねきて　沢へのあしもしほれはつらん

井水　基綱卿
そこふかき水の煙は長閑にて　井つゝにすかるたるひをそみる
残雁　桂厚」五
春はとくさそ思ふらん雪の中の　さむき田の面に雁のなくこゑ
千鳥　正広
浮世をははなれ小嶋になく千鳥　友なしとてや声うらむらん
網代　栄雅
後の世を歎く涙は露もあらし　袖のみぬれてあしろ守とも
寒月　宋世
空はれてさえぬるよりも霜くもり　雪けしられてむかふ月かな
庭雪　為広卿
とへかしな心のみちはたえぬをも　わけすはしらし庭のしら雪
炭窯　実隆卿
翁さひ炭やく里のけふりにも　かしらの雪そまかふ色なき
埋火　基綱卿
さゆる夜におとろかされて埋火を　我もいくたひかきおこすらん
仏名　正広
法の師の三世の仏をとなふるに　みなきよまはる雲の上人
歳暮　桂厚
さらぬへき春のためにも歳木切る　深山の雪の跡をもとめて
初恋　栄雅
迷ふとはきゝしにたる思ひにて　けふよりしらぬ恋のはてかな
忍恋　宋世
おもはしと思ふも身にかなはねは　しのふ心も我にまかせし

聞恋　為広卿

わりなしやそれとみぬめの浦風の　音にも浪のかゝるたもとは

見恋　基綱卿」六

ことかはし手をとる程もなき中は　かつみるにしもそふ思ひ哉

尋恋　実隆卿

われなくもとはれし里のおのれのみ　身をあらぬ世に住やかへけん

祈恋　正広

我心しめちとたのむ原の露　なみたとなりて袖にいつらん

契恋　桂厚

たのめてもいつはた人をあひみてん　しるしもあれな杉のした道

待恋　栄雅

待くれにうつりかねたる時のかす　とはれてのちとおもはましかは

会恋　（ママ）

人めよく新手枕のすきまあらは　身はならはしに又もとはなん

別恋　為広卿

又こむのことのはもかな別路の　みたれこゝろのつかねをにせん

顕恋　実隆卿

世やはうき人もなき名はいひたてゝ　たゝ我からの思ひなるらん

稀恋　基綱卿

其まゝにさてやかれぬと思ふ人の　とたえしうさはとふにまきれぬ

絶恋　正広

なからえやわたらぬ中の橋はしら　猶波かくる程そはかなき

怨恋　桂厚

露なから玉まくくすも我ゆへの　恨みにしほる袖の秋風

旧恋　栄雅

玉かつらかけにみゆるをたのみにて　心なかさも年月のそら

山家　宋世」七

住うくは又いつかたに宿かへんと　思ふに山のおくもとはれす

田里　為広卿

かそかしきいねこきたれて世は秋に　なりはひしるき民の宿かな

＊初句「かそ」、存疑。

閑居　実隆卿

塵のうちのちりの外なる住居哉　わか影かくす葎よもきふ

離別　基綱卿

とゝまらむ身のうき草よあかたみに　さそふ水たになきわかれちは

羇旅　正広

せきこゆる人もこそあれ相坂や　ゆくもかへるもしるへする月

海路　桂厚

よる嶋はいつくなるらんやすからぬ　其身を浪にいつる舟人

野宿　栄雅

ふかき山の旅ねならねと鳥の音も　きこえぬ野への明かたの山

故郷　宋世

先にしる葎のかとのさしなから　人の心もあれて住とは

眺望　為広卿

うき雲のあしたはきえて波の上に　のこる絵しまの月のあり明

述懐　実隆卿

おもひとる心たになき身の終は　憂をも捨ぬなにやのこさむ

懐旧　基綱卿

何かせむ老いをとかすは忍ふ世に　たとへはかへるむかしありとも

哀傷　正広

武蔵野やはしめもはても白露の　きえてやとれる月もはかなし

蕭寺　桂厚」八

法を聞こゑにはあらていたつらに　我身のさまをあかつきのかね

瑞籬　為広卿

祈てふ道をたゝすの瑞籬や　へたてぬ袖のこゝろなるらん

祝言　実隆卿

えそしらぬ君をいはへはさゝれ石に　たとへていふもかきり有けり

（以下裏面マデ空白）」九

【略解題】

まず、『国立歴史民俗博物館資料目録［八－一］高松宮家伝来禁裏本目録［分類目録編］』（二〇〇九）を参考にしつつ書誌を掲げる。

縦二八・三糎×横二〇・三糎。袋綴一冊本。練色地淡黄色椿唐草文の表紙左肩に外題（題簽）「続百首和歌〈長享二／七月八日〉」。内題「宗匠家続百首和哥〈長享二／七月八日〉」。半丁一二行。和歌一首一行書。歌題ほぼ三字下がり。本文料紙楮紙。全一二丁。奥書識語等ナシ。

本歌会資料の存在は夙に井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町前期』（風間書房、初版一九六一、改訂新版一九八四）に指摘があり知られているところである。同著に拠ると、他に宮内庁書陵部蔵『先代御便覧　廿三』（二六五－一一一三）所収本が伝わる。作者は、冷泉為広・栄雅（飛鳥井雅親）・宋世（飛鳥井雅康）・三条西実隆・姉小路基綱・正広・桂厚の七名である。

『続亜槐集』・『雪玉集』・『卑懐集之外』（いずれも『新編私家集大成ＣＤ－ＲＯＭ版』所収）に他出が見出される。

（酒井茂幸）